

でもある。大歩危の激流、岩壁を覆いつくす奇岩、広大なる平野を蛇行しながら炎天下の行動、しかしそれは今では一つの想出ともなつた。我々は忘れることはないであろうこの想出を胸に秘めながら………。 — 完 —

洞窟班 アラカルト

三 戸 忠 弘

洞窟班が探検部において何時、誰等の手によつて何処の場所で始められたか私の不勉強の結果私は明確に知らない。しかし班の歴史はもう四、五年にはなるのだろう。近年洞窟班はその目的対象の社会的新鮮さに基づいて急速な発展を示している。この時点で洞窟班自体そのメンバーについて「アラカルト的に又ボランティアにその特色を記録するのも無意味ではあるまい」と私は思います。

第一に洞窟班のメンバー（O・B、も含めて）についての特色、私が思います所では探検部に於いて洞窟班のメンバーは何が他のパートの人よりも「人のアク」が強い。その特例をO・Bの一員にも現役にも語の上に「超」という文字があてはまる人物を知っている。しかも班員一様に何らかの意味で「超（ウルトラ）」の頭文字を持つている。その特質を活動中の生活の中において見ると種々の分類にあてはめられる。

その第一は洞窟猛進型（Cave dash type）メンバー中この型に属する人物はかなり多い。この型は洞窟を見ると好奇のために眼が「ギラギラ」と輝き次の瞬間衝動的に洞窟に飛び込んでしまう。洞窟のやみや恐怖は何ら気にもとめない、普通の人なら「後込み」したくなる枝道や洞窟の割目に一番乗を目指して猛進するのである。ひどいのになると、自分の体より小さい穴をスコップで掘り開いてまでもぐりたがる型である。この型の人には学術探検をあまり得意としない。洞窟探検はスポーツであるというタイプである。この型の人をアタック隊員に加えるとリーダーは安心することであろう。

第二は博士志望型（Scholar nwish type）

この型は第一型と反対の行動を示す。洞窟に入る時は採集用具、スコップその他の物をサブザックに入れる。入洞するとそこらをキヨロキヨロ眺めまわす。

次はそこらの石をめくり始める、またはスコップで掘り始める。この型は洞内ではあまり行動しない。一カ所に「デン」と腰をすえて、スコップで掘られた穴を人指ゆびで貴重品でも取扱うごときに泥をかきわけるのである。一たび生物が見つかりと彼等は生物学者に早変わりをする。「これはなあー、ケビゴミの一種で〇〇チビゴミや、これを研究してはる先生はなあー東京自然科学博物館の上野先生でこれは〇〇の類に属するものや」何とまあ流暢に話すことか感心の他にない。またハンマーを持ってそこらの岩をガンガンなぐりまわす、その岩片を淡いヘッドランプにあてて一人御満悦の境地である。

新らしく学術的なものを見つけると彼等は息をはづませて報告にやつてくる。「〇〇さん、あそこに立派なケイブサンゴがあります。長さは10 Cm ぐらいで...」報告もたんねんに観察したあとの様に良くおぼえている。この型に類する人をメンバーの中に知っているが彼は高校時代生物の教師とその知識量を競い定期生物試験を免除されたその学校初まつて以来の人物であると聞いている。

第三は洞窟道化役型 (Cave Craun type)

この型は第一型、第二型にも属さないユニークな洞窟班メンバーの型の一つ。この型は入洞するとその洞窟の特色を自分なりに消化して、その感想を笑の中に織込んで人を笑わせる頭のキレル人である。彼等は洞窟に入ると良くしゃべる。テレビのコマーシャルの文句やその歌等何でも良いのである。その中にウイットを盛こんで他の人の心をなごませる。活動に行くと必づ一つや二つの新語を生み出る。彼等は一型や二型に属さぬ人であるから、洞内何処の場所にもあらわれる。生物採集も気がむけばやるし、アタックメンバーにも加わる。いわば洞窟万能型だとも言える。洞窟において彼等の役割がどんなに大切か説明するまでもない。沈滞のムードを破り苦しさも笑の中に消し取ってくれる型の人である。

彼等は洞窟活動で三大栄養素ではなく、それをスムーズに結びつける大切なビタミン剤の役目をはたして洞窟メンバーの中にあつてなくてはならぬ存在である。この様に数えあげれば数々の型がある。どの型も洞窟活動の中にあつて不可欠な人物である。洞窟班のどの型にも共通しているのは、紳士的女性談義であり、あくまでもその限界は紳士の域を脱しないものである。

この話題があかぎり将来の洞窟班の発展も安心して確信出来るのである。

洞窟を心さずもの多いにハツスルしよう、人物はこれくういにして活動中におこる最も興味深い洞窟心理について考えることにする。

その一「なぜ洞窟に入ると音痴も歌をうたいたすか？」この問題は洞窟に入る人なら気付くであろう。兎に角皆んな洞窟に入るとよく歌をうたう。その種類は童謡、歌謡曲、ジャズ、ポピュラー、コマーシャル・ソング色とりどりである。通常自分の音感に自信のない者も、何らかを口づさんでいる。私もワイヤー梯子を登り降りする時必づ唄うのである。

「何ぜか」これは歌を唄う事によつて緊張感を取り除く作用が働く。その緊張が強ければ強い程、むやみと歌を唄いたくなる。私は今回夏期の洞窟活動に於て強く感じた。アタックを目前にして緊張転とに口づさんだ歌が一人他の一人と連鎖反应的に大きくなる。何も考えないでせい一杯大声で唄い洞窟の壁に反響して大きく響く。実にいい気持である。ある者は高音部を唄いまた他の者は低音部、二部合唱が実にハモニー良く聞える。エコー装置は洞窟の壁である。この中で唄えば誰の歌もきれいに響く。音痴は音痴をわすれて唄える。こんなに歌が必要な場所是他にない。四方見つめても暗岩と地下水の世界で人は歌を唄うことによつて安心するのであろう。

洞窟にはさけられない恐怖や不安や危険があまりにも多い。テラスに一人の時垂直の壁に挑むとき、落石がヘルメットを音をたててかすめるとき、地下水にぬれてガタガタ震えるとき……………

皆んな歌を唄う必要があるのだらうと思う。

その2「洞窟と大キジ、小キジについて」

あまり感心の出来る問題ではない。しかし実際に洞窟を経験した人は「笑み」の感情があろう。いざ入洞ザイルを体につけてワイヤー梯子に手をかけてタイムを宣言するものが案外多い。「何だ」と聞くと「キジがしたい」と言いだす。この時の洞窟は堅穴が多い。人間は緊張すると「フト」たわいない忘れものと思いだすらしい。これは一般に知られている現象である。すなわち緊張がその原因である。しかし反対のタイプもまたある。活動中朝目がさめて例の場所へ行こうときそつても行かない。したくないものと思つて目的地に着くとまたタイムがかかる。彼は洞窟の見える木の枝に登り洞窟の約6～7度の冷氣の中で、

さも満足した様な顔で洋式トイレをすますのである。これは序の口で垂直60 mおりたその時、わすれものをはたす連中が多い。この人達は育ちが良く人に見られるのを極度に警戒する心理で真暗な洞窟を好むのであろうか。なにしろ洞窟の中では大変落着くというのが彼等一致する答えである。まだまだ洞窟心理にはほほえましい事が多くある。私は前から洞窟を人的に見る事をおもしろいと思っていたが、実に興味ある問題である。いま記録を整理中であるから次回はおもしろい結果を用意します。

この様に洞窟班は上下区別なく自由に活動を行なっているのも洞窟経験のない人は多数洞窟、活動に参加してもらいたい。 昭和40年9月18日

私の洞窟探検記

馬 場 吉 彦

我が洞窟探検記という表題でもつてここに書き始めた内容が、果して探検の真理を突いているかどうかは別にして、私が現在までに入つた洞窟において特に印象の深かつたものを載けて筆を進めて行きます。

単に洞窟といつても「石灰洞」「鍾乳洞」「風穴」「海蝕洞」 etc. と5. 6種類あり、石灰洞は概して規模が大きく、堅穴が多く存在する。

堅穴は石灰岩地層において地殻変動のごとき物理的作用により、地核の方向に亀裂が走り、その亀裂に $\text{Ca}(\text{HCO}_3)_2$ を含んだ地表、或いは地下水が流れ込み、その結果除々に石灰岩が浸蝕され、ほぼ同心円状に穴が拡大される。

この場合特に水量が多い時には穴の壁にフローストーンは見る事が出来ず、常に新しい石灰岩面が現われて汚れの少ない壁が存在する。

現在日本において堅穴が垂直に100 m以上もの深度を持つている穴は発見されていないが、階段状に円筒の穴が存在する最も深いものは、愛媛県大野力原で見つけられた215 mの穴だと聞いている。

一円筒状の堅穴の最長はおそらく我々が岐阜県で底まで見極めた熊石洞の70 mと思われる。

又一方地表からの水の流入がなく地下水の浸蝕の場合は横穴が存在するが、その地下水路に対して断面状に断層が起らなければこの洞窟を見つける事は不可能である。

このような洞窟は、石灰地層やその他の地層においても存在するはずであるから、我々が調査対象としている洞窟数の何倍にも及ぶだろう。

このように地下水によつて、地球は蟻の巣のごとく無数に穴をあけられているものである。

石灰岩層における横穴は必つといえる程、鍾乳石、フローストーン、石筍等が存在し光を投光されると洞内一面が大理石の宮殿のごとき素晴らしい景観を見せてくれる。私自身もいままで鍾乳洞を中心に調査を行つて来たが、なかには我を忘れさせてくれるような美しい洞窟にめぐり会い、その中で興味のあつたのは、沖永良部島（S 39 年3月）三重県伊勢市の鷲嶺洞（S 39 年8月）、岐阜県熊石洞（S 39 年12月）、徳之島（S 40 年3月）、但馬海蝕洞（S 40 年6月）、の洞窟でありこの内容を順を追つて述べて行きます。

まず沖永良部島は39 年我部の洞窟 斑再建と同時、我々は隆起珊瑚礁の島、沖永良部に目を向けその島に存在する洞窟を調査することになりました。

この島は鹿児島県の南海上にある奄美諸島に属し与論島に次いで日本で第二番目の最南端に位置し、気候は亜熱帯性に属するので大阪との気候のづれは3 月ほどテンポが早く、島に滞うムードは我々が訪れた時既に海水浴が出来るほどの陽気であり、植物においても蘇鉄、パパイヤ、砂糖キビ、バナナ、パイナップル等の南国植物が栽培され、人々の服装に関しても本土の6~7 月頃の装いで、私がキルティングを持つて行つた事は笑いの種になつてしまつた。

現在この島は和泊町と知名町の2 町に別けられており、知名町に関しては、既に愛媛大学がその調査を行なつており、我々は和泊町を中心に調査を進めて行くことにして、同町の公民館兼教育委員会である館にベースを置き活動を始めた。

和泊町における調査の主だつた洞窟は、後蘭、古里、玉城、国頭等に存在するもので、古里を除いてはほぼ100 m 前後で鍾乳石の発達是比较的若く、長くても30 Cm 程度で、生物も生棲せず、石灰岩の純度は悪く、粘土を多量に含んでいるために、全体的に赤土色を示し、洞内は雨期において多量の雨水が

流入し、そのために土砂や木の枝が持ち込まれその木の枝が、天井の鍾乳石にひっかかっているために雨の排口となっており、又この雨水の量が多い為に鍾乳石の発達が悪化されていることが推測される。

和泊町古里の洞窟は入口の一方が海に面していると地元の人々の話であったので、今回の調査において最も期待していたのであったが、その結果は海に面しているところかはほぼ南の方向に屈曲して、出て来た所が入口より約400m程離れた他人の裏庭に出るという始末で全く期待を裏切られ、洞窟に関する地元の話は実際に調査を行った場合と、かなり違うという事を学ぶと共に神話的な伝説を持つ洞窟に対する調査の必要性を感じさせられた一幕であった。

一般的に和泊町の洞窟は底面は雨期の泥の流入により厚い粘土に覆われ、天井は低くホールも少く、最奥部は天井と泥によりはばまれ前方を塞がれている。この調査において私を最も魅了させたのは、知名町にある昇龍洞という鍾乳洞で、愛媛大学によつて初めて開発され、洞内の鍾乳石、石筍、流れ石の発達は素晴らしく、私が過去に見た洞窟の内最も美観に富み、観光立地資源として最適であり、山口県の秋吉洞に肩を並べる程見るべき石灰岩の造形美が存在し、又この洞内には人骨が見つけれ、その骨格から推してみると現在の日本人より大きく、南方系の人類がこの島に居住していたと想像されている。現在この洞窟は観光開発され入場料を取っている。

次に伊勢市の鷲嶺洞これは石灰洞であり全長は315mあり規模としては中位であるが、高さと幅が著しく小さくなつて歩ける地点が少なく、大半を匍匐前進で進まなくてはならず、手の平や膝頭が赤くなるほど前進が困難で、洞内には3つの滝を持つており内2つは涸滝であり、観光性には不適で目を楽しませてくれる美しさは何も存在していない。その反面この洞窟には蝙蝠の糞の堆積が多く、その上にカビが生えている光景は異様である。

蝙蝠の糞は臭気が少なく、その上に乗るとスポンジの上に乗ったような感じがする。又この洞窟には古くから伝説がある。というのは1185年平家が壇の浦で滅亡した頃、平家の武将、平知盛が落ちのび余生をここに送つたということであり、下村菰蒲にある久昌寺という寺院にその真疑のほどは明確ではないが、かなり考古学的、地学的に信用出来る資料を持つている。

第3番目の熊石洞は堅穴で、まだ前人未踏とされ、我々の志気を大いに高揚

させ、横穴に較べて危険性も多く、我々洞窟探検マンに対して種々の高度な技術及び装備を要求した。

我々にとってこの堅穴が何メートルあるか全く不明なので、一応全長70mのワイヤー梯子とザイル150mを用意し、慎重なる調査活動を行う事にした。種々の努力の結果我々は3日間を費してその全望を明らかにする事が出来、その全長は150mで日本において第2位にランクされる深度を持ち、3段階形式になっている事が解かり、ことに第三段階目は一息に70mを降りねばならず、全装備をこの地点に集中し、日頃鍛えた精神力により恐怖心に打ち勝つことによってやつと成功することが出来た。

最後の70mを降りる為に私と平元君が選らばれたが、降下前に洞底を見るとカーバイドランプの光が、はるか70m下にボーツと見え、逆に半径10mの円形の底より隊員たちのいる場所を見ると、果して彼等の居る地点まで無事に戻れるかと思い、洞底を極めた喜びが不安に変わるのを押え得なかつた。

又この洞窟には動物の化石が多く散積し、考古学的見地においても重要な資料を埋蔵している。

第4巻目は最初に述べた沖永良部島の北隣りにある徳之島で永良部と同様、隆起珊瑚からなる南国ムードを秘めた島で、ここには息穴（イキエー）と呼ばれる洞窟がある。この洞窟は横穴で先刻愛媛大学が入洞を試みたが入れず、我々は入口を少し崩し初めて入洞することが出来た。

過去において入った横穴は全て我々が入る以前において、誰かが入っており洞内が落雪や鍾乳石を破壊する等されて、荒されていたが、息穴は処女洞窟であり、何万年間もの息づかいをそのままの姿で我々に見せてくれた。この洞窟の特徴は最深部に直径50m程の大ホールがあり、その中央に直径0.5m、長さ8mの大石柱があり、それを中心にして四方八方に種々の形をした1~0.5mの石筍が林立し地中の荒野のような雰囲気を持ち、我々を重苦しく圧迫するように思はれた。

途中においては30cm以上の鍾乳石が群がつて垂れ下り、槍の吊天井のようであり、2カ所程には約1.5mの高さがある蝙蝠の糞の山があつた。

もう一つこの島には小島暗川と呼ばれる全長500mの横穴があり、この洞は出入口のある貫通した洞窟であり、一方の口が海岸に面しており、伊仙町役

場においては観光開発の計画を持っており、既に部分的において人工的な手が加えられている。

この洞内には約18mの大規模な滝があり、洞内全域に渡って地下水が海岸に面した「口」に向って流れており、水量はかなり多く我々が役場の要請により測量を行つた時も大腿部まで濡れねばならなかつた。なおこの洞窟には一本の枝道があるが、その枝道に存在する石柱が多分落盤により天井から離されたり、途中で切断されている為に、地中の室にテーブルが並べられたような景観を示していた。

その他この島に在る前山洞、赤牛穴、検福穴、八幡洞等の洞窟には民族的、伝説的関係が深く観光性にも優れており、これらが本土に存在するならば直ちに観光開発されるだろうと思われる程素晴らしい条件を備えていた。

最後は但馬海岸にある海蝕洞で、但馬海岸には何年間もの波浪の彫刻及びより無数の海蝕洞が点在し、兵庫県も観光地として開発する事に本腰を入れ始めており、我々が神戸新聞の記者の方と同行したときには既に海岸線を遊覧船が走っていたが、まだまだ十分に海蝕洞を生かした開発が行なわれていなかった状態であつた。

この海蝕洞の大半は海面にぽつかり口を開いている部分と、地中に没している部分とがあり、波が静かな折には小さな伝馬船ならば自由に出入が出来る。この地の洞窟群の中に、日本洞門と呼ばれる石灰岩質を含む凝灰岩洞窟には、鍾乳石、フローストーンが出来ており、蝙蝠の生棲している洞窟もあつた。

我々は今日まで主に鍾乳洞や石灰洞を対象としていたが、但馬の探検活動により洞窟探検におけるより広範囲な対象に目を向けることを学んだ。

以上まとまりなく述べてきました事が、私が洞窟探検を始めて今日、現在まで歩んで来た私の洞窟探検紀行であります。今後においてはより深く個々の洞窟を見る力を修得し、洞窟の素晴らしい地下の造形美、息づかいを見る事に「楽しみ」「探検活動」を求めたいと思いながら筆を置きます。